源氏日報

スカウトされた継体天皇

外号

大阪府高槻市に注目の古墳があります。それは今城塚古墳。２重の掘りを含め全長320㍍余の巨大な前方後円墳。堀の外には50㍍にわたり様々な埴輪が並んでいます。

鎧を着た一群、力士等など200体葬られた権力者の大きさを物語っています。

この古墳の主を多くの研究者は継体天皇だと考えています。

歴史的初めの天皇で聖徳太子の曾祖父に当たります。実は継体天皇は極めて異色の天皇でした。出身は権力の大和から遠い北陸。先代天皇との血縁も薄かったのですが、大和の豪族達に即位を求められたのでした。

一体なぜ地方の豪族が天皇になれたのか？　また、いかなる人物だったのでしょうか。長らくその事実は謎に包まれていました。しかし、最近の発掘調査と研究は、その謎を解き明かしつつあります。

大和政権が衰退する一方で、急速に力を伸ばす地方の勢力。その中で継体天皇に求められたものとは・・・継体天皇とは何者かについて深掘りしたいと思います。

地方出身、異色の天皇の出現は古代日本をどう変えたのでしょうか？

継体天皇　６世紀前半26代目の天皇(450～531)　当時天皇という呼び名はありませんでしたが、後に書かれた日本書紀に準じて、ここでは継体天皇として進めていきます。

異色と言われるのは、先ず、御本家天皇ではなく地方に行った分家皇族から即位された天皇だったからです。地方出身の大君ということもあって謎が多いと研究者達はいいます。

ただ、嬉しいことに継体天皇が葬られたのは今城塚古墳ではないかという点です。

普通は、天皇陵(墓)は発掘することができません。しかし、この今城塚古墳は天皇陵に指定されていないため、発掘が可能なのです。　会いに行ける天皇陵なのです。

まだ、日本が倭国と呼ばれていた6世紀初め、大和政権は大きな危機の中にありました。

日本書紀にはこう記されています。「小泊瀬天皇が崩御。ところが、天皇には身近な息子や親戚もおらず、後継者候補が居なくなってしまった。・・・政権の中心である天皇がいない。正に大和政権崩壊の危機である」と、・・・

そんな危機が起きた理由は、武烈天皇の４代前雄略天皇の時代にありました。

日本書紀には、雄略天皇は誤って人を殺すことが多かった。人々は大悪の天皇であると言ったと書かれています。雄略天皇は天皇になる為、ライバルを次々と殺していきました。そのため、後継者候補は極端に少なくなり、武烈天皇の代で跡継ぎがいなくなってしまったのです。

大和政権を支える有力豪族の物部麁鹿火と大伴金村は後継者探しに奔走します。

そこである人物の名が上がったのです。「男大迹王(おおどのおう)は王位を継承なさるべき方である」・・２人が選んだ男大迹王は武烈天皇の５世代前、応神天皇の代に分かれた家系の５代目にあたります。

また、そのプロフィールも極めて異色でした。

生まれは、大和から離れた近江の北部。父の死後に母の故郷である越前に移り住み、その地を治めます。当時５７才。当時としては高齢であるが、なぜ、この高齢者が後継者に選ばれたのか？・・琵琶湖の西岸に位置する滋賀県高島市。男大迹王の故郷であるこの地から、跡継ぎにえら張られた理由の一つが浮かびます。男大迹王の父　彦主人王の墓とされる田中王塚古墳から男大迹王の一族について分かるものが発見されています。

高島市の古墳群は７０基余造られているが、田中王塚古墳は中で一番大きい古墳です。

ここから、この地域を治めていた豪族ということが読み取れます。

また、日本書紀によると、男大迹王は母の故郷　越前を治めており、越前と近江の豪族を従える王に成長していたことが想像されます。さらに男大迹王を支えていたのが、尾張の大豪族　尾張連。このように、越前、近江、尾張の大豪族に支えられていたことが後継者候補になった理由の一つではと研究者は考えています。

また、日本海側を治めることによって朝鮮半島との繋がりも強く、男大迹王と百済の武寧王の繋がりも強く、武寧王から人物画像鏡などが送られており、外交の広さが窺えます。これらも後継者候補の要因だったと言えます。

考古学者談によると

「継体」というのは、後で付けられた中国風の名前なのだが、体を継ぐという、なんか中継ぎみたいに思われるかも知れない・・古来、強力な天皇には、〝神〟とか〝武〟が付けられているが、これらと比べると、ちょっと冴えないイメージがあったのですが、考古学の目で見ると、継体天皇の時代にいくつもの事が変わっている古墳のフォーメーションが変わるとか・・この時期に社会がごろっと変わってきていると言います。

福井の地での継体天皇については、また、別の機会に活字に落としたいと思います。